みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

西欧型服装の形成：和服論の観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大丸, 弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003771

4. あとがき——二，三の附随的問題についてのメモ——

“非歴史的特色”について

2-1～4の叙述において，私は和服との対比でとらえた西欧型服装の諸特色を，その形成の過程の中で分析した。一般論としていえば，19世紀末から20世紀初めにかけてのおよそ半世紀のあいだに認識された西欧服は，その時代を数百年もさかのぼる，中世後期の西欧服の実際とのあいだに，すくなくない不一致のあることが当然予想される。その点を考慮にいれるなら，29頁に示した諸特色が，中世後期の服装の具体的展開のなかで，その成立についてのあるていどの必然性をみいだしえたことは，西欧型服装の性格決定における，この時期の重さと，その後の数世紀の衣文化の基本的安定を示唆するものといえよう。

しかしもとより，本稿でとりあげられた特色が，和服との対比のうえでとの限定をつけたにしても，西欧型服装を性格づける要因のすべてではありえない。西欧型服装論として私がとくに中世後期をとりあげたのは，服装様式の展開のながれの中での，多くの専門家の指摘するとりわけ重要な転機が，この期間に集中し，それを“西欧化”と意味づけたのが理由である。したがってこのスパンからはずれた歴史的時点で，なんらかの転機を経験したような要因，あるいは風土的条件といわれるものに含まれる諸要因，さらには人種的要因のような，ある意味での“非歴史的”要因については，

77）もっとも有名なもののひとつは，Alison のアソシエーション説における相対論 [Alison 1790: 364–372]，その説をうけ，美とは無関係と言いきる Walker [1837: 7]，美の基準が失われたことによって，ファッションが生れたとする Baldwin [1934: 9]，そのほか [Thoughtfullness 1868: 282, 293–295; Cunnington 1948b: 38; Vallée 1925: 25]。

いずれ本稿の後を追って議論の必要があるであろう。

3-2 および 3 において紹介した，西欧人自身による西欧服認識においては，当然のことながら，この“非歴史的”要因についての問題意識は，低い，といういいかたが正確でないまでも，われわれがつよい関心をもつような視点からの接近は，他の要因にくらべると濃密ではなかった。たとえば西欧人は，西欧型衣服の密着性に関連する問題に熱心なほどには，その密閉性については，問題を意識しなかったふしがある。また，毛織物のもつ素材的可能性については，最近になるにつれいくらかの言及はみられるようになったものの，そのほとんどは，概念的，示唆的な内容にとどまっている。あるいはまた私が 3-2 の冒頭で指摘したような観点での身体観照の自覚にはとぼしい。

うえにあげた 3 つの要因は，“非歴史的”というのとおなじ意味で，西欧の中世後期服装の展開をたどるうえでの，前提的条件だった，といういいかたもできよう。こうした見方を表 6 にかさねて，衣服特性の展開のあらすじを要約したのが，表18である。

くりかえし云うが，私がここで“非歴史的”という意味は，とくに中世後期というスパンの範囲内において，問題的でなかったか，あるいは歴史的展開の主題としては，議論の対象となる機会の少なかった要因，ということであって，それらが本来的に，西欧型服装の，歴史を超越した本質であるなどという意味ではない。けれども，仮りにここに例示した 3 要因についてみても，そのうちのあるものは，西欧文化の全体構造の中で，衣の領域をこえたひろがりの根をもつ事実がみてとれる。

ある様式的特色が服装以外の領域とのあいだに共通性をもつ例として，しばしばあげられてきたのは，各時代の建築物の外観との関係であった[78]。あえていうならば，単純な外見の類似を根拠とした，皮相な時代精神論がしばしば説かれたのである。もし今後，私がここで“非歴史的”と仮りによんだ要因を中心に，西欧型服装のさらに根の部分を堀りすゝめるのであれば，とりわけ密閉（被覆），坐臥を軸とした居住様式，性の意識をふくめての身体論，とくに衣服素材と関連しての風土論といった部分に関して，慎重な構造的分析を必要とするであろう。

展開のダイナミクス

表18において，定型服装が成立した第Ⅲ期に示した諸傾向が，和服と対比しての，西欧型衣服の主要な特色である。もとより，衣文化全体の性格は，このような物的観

78) Laver 1949; Heard 1924: 21 など。Heard の場合は，建築と服装の organic relation の指摘であるが，美術的様式論の範囲を出ない。

表18 中世後期の衣服特性展開のモデル

		I 期	II 期	III 期	
素　材	麻　織　物			ランジェリー愛好	(72頁)
衣タイプ	体　形　衣		密　　着		
			密　　閉	関節部の強調	(121頁)
	かたちへの執着				
身体観				プロポーション尊重	(120頁)
	区　分　性		寄せひだ	密着開放	(53頁)
素　材	広　　巾				
	毛　織　物		ふくらみ・球状衣	裁断志向	(71頁)
		ひだの魅力	布ののび		
衣タイプ	布　形　衣			フィット性重視	(68頁)

点のみで尽きるものではないが，本稿で用いた基礎資料の性質上，議論の及びにくい部分を多く残したことは残念である。ただし，物としてのスタイリングとはごく近いところにあるファッションと関連して，私は最後に様式展開のダイナミクスについて触れておきたい。

たとえば，やわらかいひだが，硬い人為的なタックに変容するのは，“自然のなりゆき”なのではなく，変容を動機づけるダイナミクスがあるはずである。そうしたダイナミクスとして，もっとも常識的な意味での生活の向上を軸とした，一般的進歩への意志，あるいはむしろ生活の向上そのものへの欲望を考えることは，許されてよいであろう。

しばしば，ある生活様式を特色づけている条件が，じつは貧困以外のなにものでもないのではないかという例に，われわれは行き当るのである。Mearsは，日本の若い娘たちの晴着のキモノの，前近代的なけばけばしさを，日常の暮らしの貧しさの反映という見方をした [Mears 1943: 37]。この批判自体の当否はべつとしても，和服の特長とされる，はしょり，繰りまわし，数世代にもわたる利用など，経済性とむすびついた着装習慣のいくつかの智恵が，布地がきわめて貴重であった，西欧のある貧しい状態の中では，同様にみとめられることは事実である。

また，新しい技術や材料の導入によって，後もどりのありえないような生活上の価値を手にいれるような場合がある。和服における手縫いへの執着とおなじ状況と心情が，1世紀以前の西欧でもふつうのことだった。肉体的労苦と貧しさから向上しようとする意志においては，本質的に西欧と日本の衣生活にちがいのあるはずはないのだから，そうした変容のダイナミクスは共通でなければならない。

このような“改良”や“進歩”は，すでに紹介したように，ファッションとおなじものではない。一般的にいえば，ファッションにおける価値とは，その社会の中においてさえ相対的であり，ある時間的経過のなかで評価したとしてもその点は同様であることがふつうである。以下，中世後期における西欧型服装形成へのダイナミクスのうちで，私がとくにここでとりあげるふたつの傾向は，西欧のその後の時代の，ファッションダイナミクスと，非常に近いところにある。

そのひとつは，造形理念の自己肥大化の傾向である。西欧の服装史家の中には，この傾向，すなわちある衣服様式の競争的な誇張，ないし極端化を，ファッションの本質とみる人がすくなくない。美的観照の立場から衣服を見る人にとって，ファッションという現象が概して嘲笑や嫌悪の対象であったのは，そのもっとも大きな理由がここにあったのである。そしてファッションにおいて衣服の様式が，一方の極端さから転じて，その反対側の極端さへと揺れるという，あのもっとも素朴なファッション理論―スィング説を生みだした[79]。また，またこのスイング説をべつにしても，西欧服装の史的敍述において，ある衣服様式の肥大現象，たとえば poulaine, hennin, lilipipe から，18世紀の宮廷風 panier（いずれも fr.）等の巨大化した状態を，とりわけ興味をもってとりあげる，という態度もみとめられる。和服におけるファッションの推移は，定型性衣服と素材順応系衣服の基本的相異点はしばらく措くとしても，一般にはべつのパターンをとる。仮りにAという様式が，その時のひとびとの好みに投じたとすると，そのAの内部の感覚的価値のバラエティが模索され，やがてAに倦んだひとびとの好みが，つぎのB様式に移るのである。

ダイナミクスのべつのひとつは，対象の抽象的定型化の傾向である。それは流動的なかたちを動きのない状態におこうとし，多様で不確定なものを抽象して一定の枠づけをおこなおうとする意志である。造形理念の肥大という傾向も，それは形式的肥大であって，抽象化の方向にほかならなかった。このふたつの傾向を通じて，西欧衣服における造形ダイナミクスの方向には，自然発生的な，素朴な感性への耽溺に，長くはとどまろうとしないという特質を，私はみてとるのである。

謝　辞

本稿で用いた文献，および造形作品の複製資料の収集・整理については，MCD〔民博コスチュームデータベース〕，大阪樟蔭女子大学衣料情報室，高橋晴子，中島馨子，飯田裕香，神津夏美，八島玲子の協力を得た。

79) Haweis 1879: 46; Graterolle 1897: 112; Cunnington 1948b: 18; Tailor's 1796: 7.

試料2による女物袷長着の製作は，大阪樟蔭女子大学武内せつ名誉教授の指導のもと，奥田雅子さんが行った。

縫製技術の個々の問題に関しては，下記の方々の助言に負うところが大であった。末尾ながら，感謝の意をあらわしたい。

武内せつ
嶋　清子
寺西正文

なお本稿の1-2-2は，日本風俗史学会第25回大会（1986・10・18）において，また3-2の一部は，日本家政学会被服心理学部会第3回講演会（1986・8・26）において口頭発表を行った。

また1-2-2に関する，国立国会図書館における文献探索については，国立民族学博物館特別研究<現代日本文化における伝統と変容>1986年度館外研究員（高橋晴子）等旅費の割当をうけた。

b

写真 A–1　試料 2 による女物袷長着

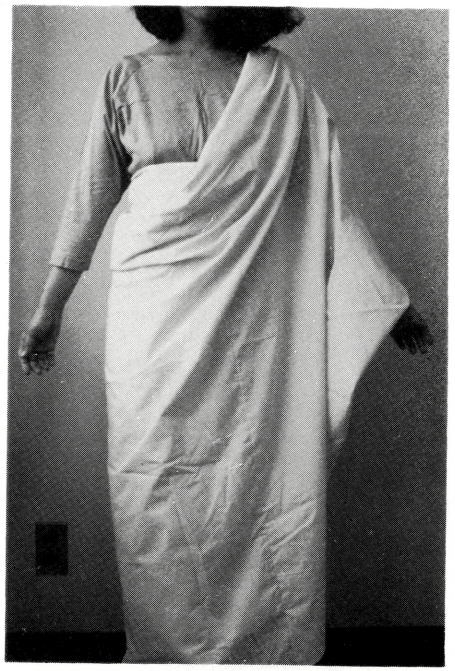


写真 A–2　半円の布によるAタイプ布形衣（試料5）

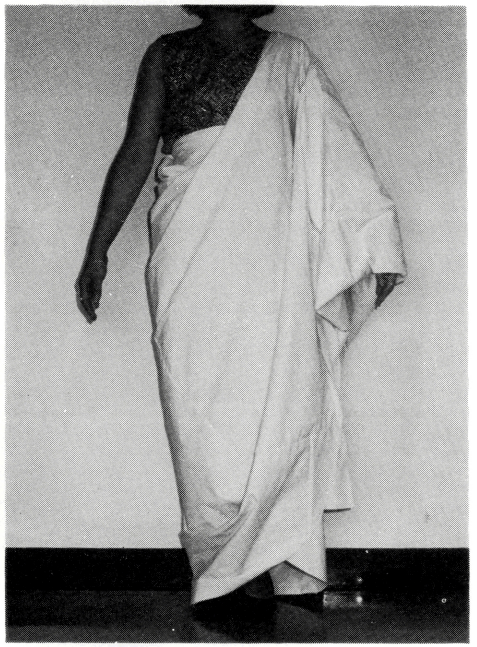


写真 A–3　全円の布2つ折によるBタイプ布形衣（試料5）

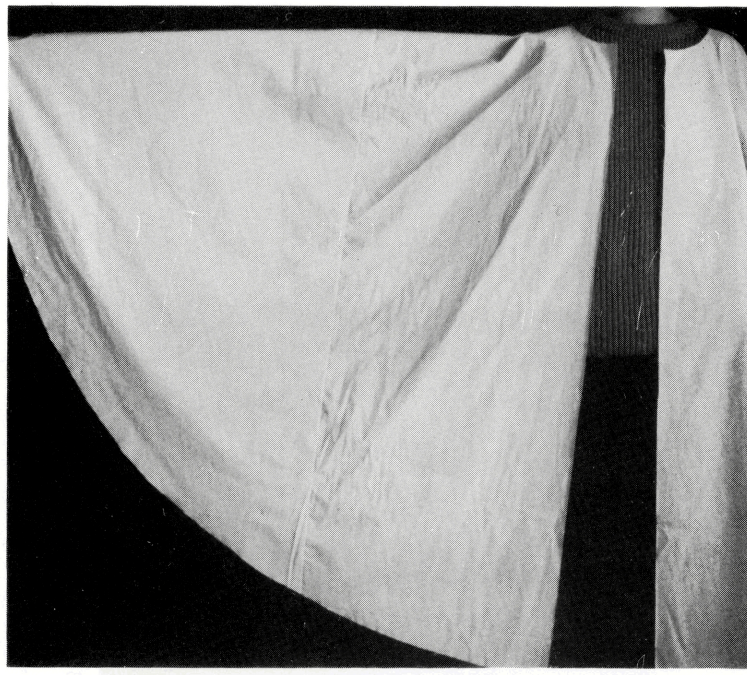
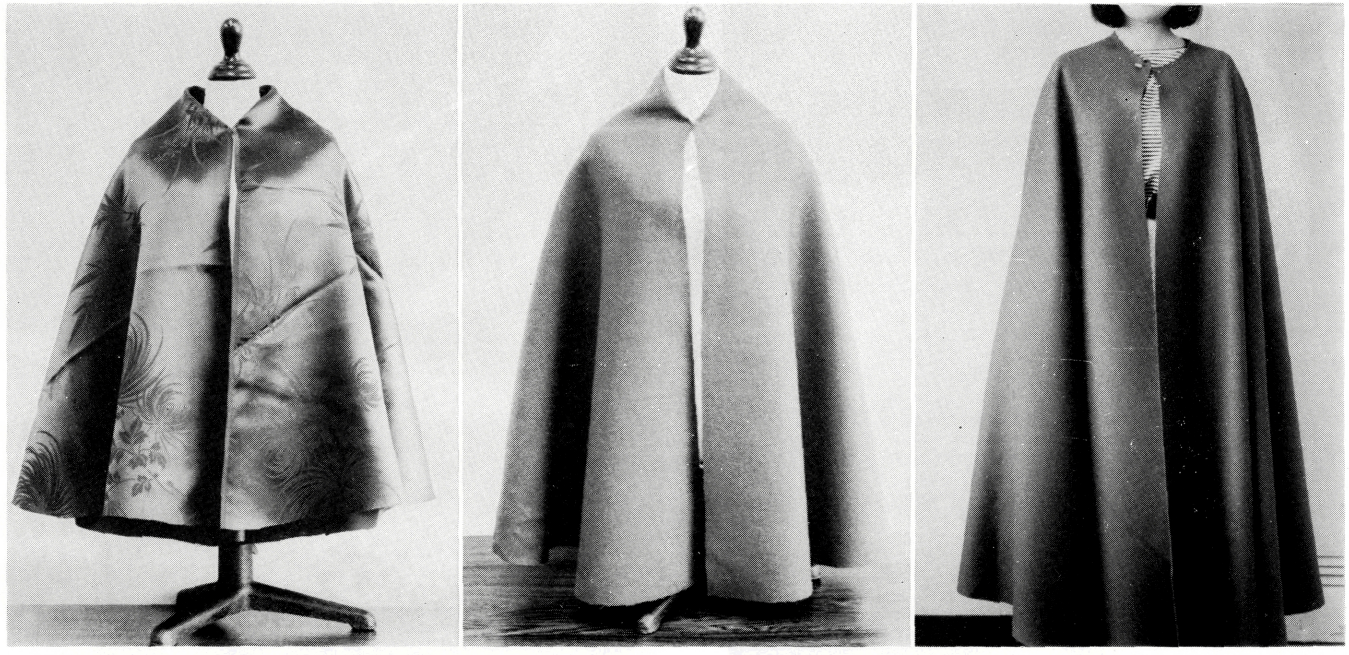


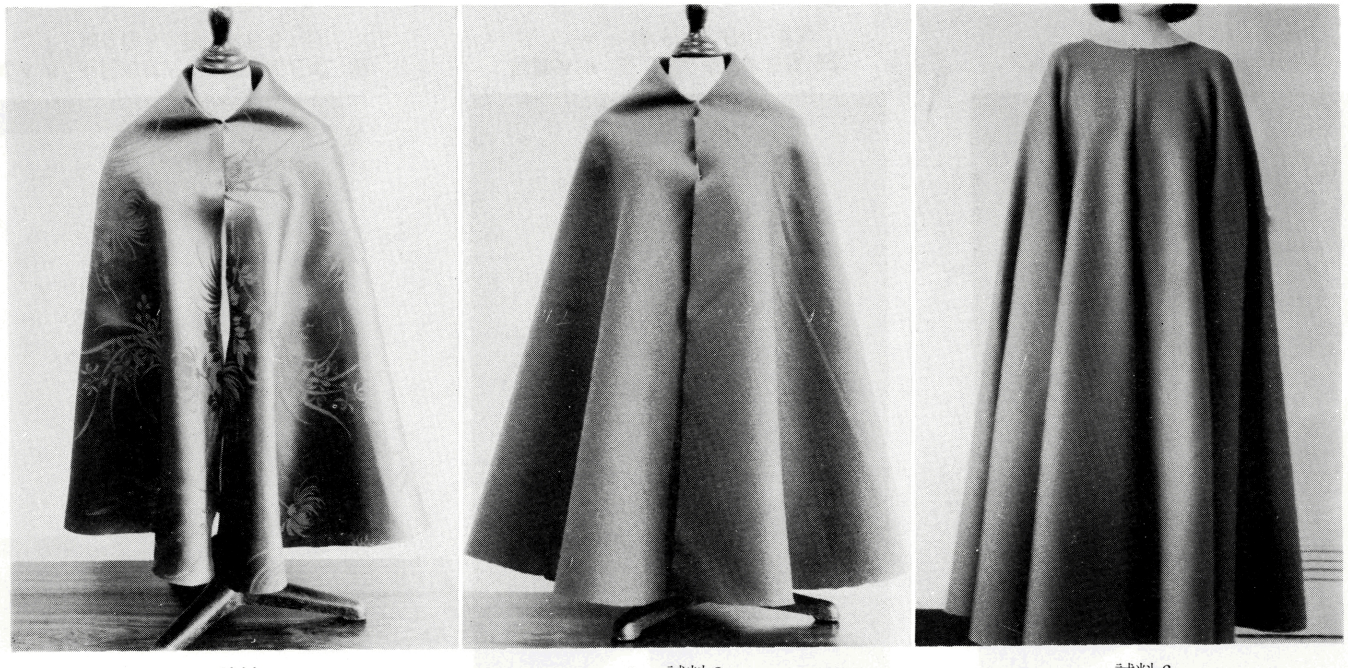
写真 A–4　全円の布によるBタイプ布形衣（試料５）

写真 A–7　帯に引寄せられ舟形の擬袖をつくる挾体衣（試料１）



a　試料4　　b　試料3　　c　試料6

写真 A–5　布目が前中心線に添った，半円布のBタイプ布形衣



a　試料 4　　b　試料 3　　c　試料 6

写真 A-6　前中心線が正バイヤスの，半円布のBタイプ布形衣

写真 A-8　全円布形衣を一部裁断して，重袖を作った例（試料６）

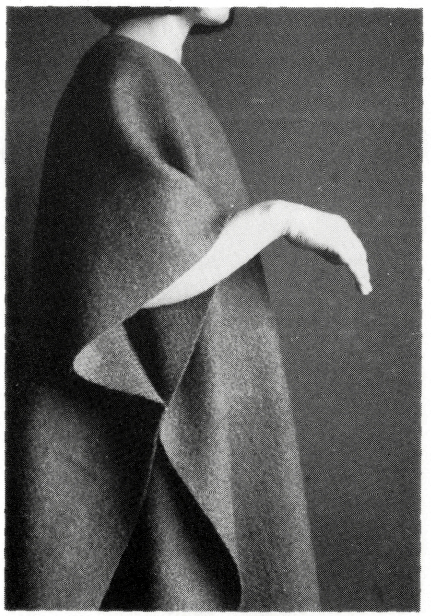


写真 A-9　長方形の布による挟体衣（試料１）（図7-ｂ）

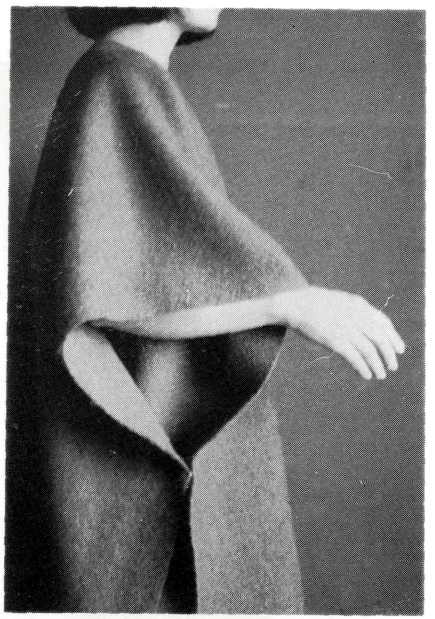


写真 A-10　肩に庇をもつ挟体衣（試料１）（図7-ａ）